

## 『日本の地下水政策』を読む

写真は千葉知世著『日本の地下水政策』京都大学学術出版会、2019年3月である。年末の研究会で本書のコメントを行うことになり、付箋をつけながら読んだ。本書を手にする前には、地下水は地表水（河川、ダム、水道など）に比べ関心は低かった。著者がなぜ地下水に関心を持ったかに、まずは関心が向いた。本書を読み進むなかで、私も地下水への関心が高まっていった。本書のなかで、とくに注目した点などを記していきたい。



著者は地下水の利用形態が多様化して、地下水政策とそのガバナンスが求められると指摘する。ここに著者の問題関心があり、調査研究の歩みが始まる。そのなかで、本書を貫くキーワードである地下水ガバナンスについて次のように定義する。「多様なステークホルダーが垂直的・水平的に協働しながら、科学的知見に基づき、地下水の持続可能な利用と保全に関して意思決定し、地下水を保全管理していく民主主義的プロセスである。同時に、地下水とその関連領域における法制度的・政策的対応の包括的なフレームワークである」

著者は本書の目的として、「今後の地下水政策・ガバナンス研究において議論の土台となり得る基礎的資料を提供」することを挙げている。本書を読み、この目的はかなりの程度「達成」できているように感じた。地方自治体の地下水関係の条例の収集と確認、膨大な巻末資料、とりわけ略年表や判例、条例分析は資料的価値がある。海外を含めて文献サーベイと先行研究フォローがなされている。自治体への質問紙調査と統計分析も地下水ガバナンスを検証するうえで参考になる。

著者は本書の「野心的な目標として、日本の地下水保全管理にガバナンス概念からの接近を試み、今後の地下水ガバナンスの構築に向けた知見を抽出することを目指す」としている。こうした野心的な目標に対して、著者は残された課題として地下水政策の都道府県の役割、水質保全、地下水ガバナンスの学際的な研究などをあげる。

本書から多くの知見と刺激を受けたが、私なりに地下水について考えていきたいことを示しておく。第1に、地下水と災害について。先日もレポートしたように、『新修大阪市史』第8巻に「沈みゆく大阪」という項目がある。戦後の大阪市の地盤沈下と地下水だけでなく、最近の水害などの災害についても地下水の影響を調べてみたい。

第2に、日本の屋根に穴をうがつりニア計画と地下水について。静岡県の大井川源流の地下水問題など、巨大開発が地下水に及ぼす影響である。

第3に、地下水と地表水、なかでも水道との関係について。1年前に水道法が改正され、水道の民営化、広域化が新たな展開をしている。こうした動きが地下水ガバナンスにどのような影響を及ぼすかに注目していきたい。

(2019年12月13日)